◆連載 いま留萌むかし 第三十一話

●留萌最初の村

三泊の高台に留萌で一番古く人間の住んだ跡があります。三泊遺跡とよばれています。今から七千年ぐらい昔のことです。このころは縄文時代（じょうもんじだい）の初めのころです。

気候は一万年ぐらいまで続いた最後の氷河時代が終わり、だんだんと暖かくなっていく途中でした。そのため、氷河時代に大陸の上に積もっていた氷のかたまりが融け初め、海の水が増えて、現在よりも十数メートルも海水面が上昇したのです。そのため、三泊の高台のすぐ下が波打ち際であったことでしょう。留萌川の河口の平野部は内湾となり、海が深く入り込んでいたことでしょう。海岸から少し奥に入ると落葉広葉樹やマツなどの針葉樹の入り混じった林があり、鹿、熊、兎などの獣たちが多くすんでいたことでしょう。

そんな海岸と林の中間の開けた草原に人々は家をたて、くらしていました。家といってもその当時の家は竪穴式住居といって、地面に穴を掘り、その上に草葺きの家を作ったのです。半地下式の住居といえます。竪穴式住居は夏涼しく、冬暖かい合理的な家だったのです。

この当時の村は二から三軒の家がある程度でした。現在の村のイメージとはだいぶへだたりがあります。大きくても数家族が集まって村をつくっていたのです。きっと、親戚一族で一つの村をつくっていたと考えられます。

当時の生活は春夏秋冬と自然の恵によってささえられていました。春の山はワラビ、フキ、コゴミ、エゾエンゴサクなどの山菜、海ではニシンそれを追ってくるクジラなど夏はオオウバユリ、川をさかのぼるマス。秋はヤマブドウコクワ、キノコなどの山の幸そして、サケ。冬は山の獣たちの狩の季節。そのほか、年中とれる海藻、貝、ウグイ、カレイなどの雑魚。また、トド、アザラシのように季節的に回遊してくる海獣たちも彼らの食卓にのぼったことでしょう。

まだ、この人たちは金属をしりませんでした。それで石を打ち欠いてつくったナイフや矢じり、槍、石を磨いてつくった斧などを使って道具としていました。これを石器（せっき）といいます。また、骨や角を削ってつくった骨角器（こっかくき）、木を削ってつくった木器（もっき）を使っていたのです。

また、今の鍋釜の代わりには土をこねて形をつくり、焼きあげた素焼きの器を使っていました。これを土器といいます。これには時代と地域によって流行があり、時代を決める目安や、地域の交流をさぐる決め手となっています。土器の表面に縄を転がした模様があるので縄文土器というのです。そして、縄文土器を使っていた時代を縄文時代といっているのです。

三泊の村の様子がどうなっていたかを知りたい方は海のふるさと館に来て下さい。その当時の生活をジオラマで展示しています。

三泊村のくらし

●特集 市民施設見学会と市政懇談会
平成元年7月／発行・留萌市
編集・企画 振興室
印刷・株式会社 留萌新聞社
1989 7